

# 接辞と連結辞の辞書記述について

西川 盛雄

## Lexicographical Description of Affixes and Combining Forms in English

Morio NISHIKAWA

(Received October 3, 2005)

This paper aims at conducting a lexicographical survey of the description of affixes and combining forms in English. First we propose the two-fold strategic aspects for the morphological study of word formation, analytical/compositional and synthetic/Gestaltic. Words produced in the compositional process of word formation are characterized by combining a lexical stem/root and affixes/ combining forms. Contrastively, the process of synthetic word formation produces a word from a phrase/sentence by lexical idiomatization. Second, we claim that English has three basic elements for word formation, LF (lexical form), CF (combining form) and AF (affixal form), although they are sometimes difficult to make a clear-cut distinction from each other. Then we propose a matrixal model of possible combinations of word elements of LF, CF and AF. This model integrates the nine possible combinations of word elements. Third, we will make a detailed survey for the lexicographical description of affixes and combining forms. We look up 10 authentic British and American dictionaries, checking how 139 English prefixal word elements are listed and described in each dictionary, in other words, we inquire into whether they are listed as affix or combining form. As a result, we acknowledge that the number we obtained from this research is suggestive to determine whether a given word element is affix or combining form.

**Key words :** affixation combining form compositional lexicalization lexicography

### 1 はじめに

辞書 (lexicon) は記憶された知的財産として私たち人間の脳皮質に貯蔵されている語や語形成要素についての発音, 意味, 語源, 成句さらには文法事項についての情報の総体である。そして具体的なコミュニケーションの場においては文法規則 (grammatical rules) とともに lexicon が重要な役割を果している。しかしこの lexicon の中身は複雑である。語とは言いながら, 単純語 (simplex word) だけではなく接頭辞, 接尾辞を付けることによって新たな語を生成する派生語 (derivation) のような複雑語 (complex word), さらに複合語 (compound), 混交語 (blending), 短縮語 (clipping), 頭字語 (acronym), 逆成語 (back-formation), 再分析 (reanalysis) など語形成過程の種類は多様である。さらにイディオム的に句 (あるいは文) から語彙化によっても語が作られる。そしてあるまとまった言語形式は一定の習慣性と使用の頻度数が得られれば, 辞書編集者の判断で辞書項目として記載 (list) されることが可能になるのである。

辞書学は実証主義的な知的探求の方策 (strategy) を用いる。言語使用における語法 (collocation) において語や語形成要素, さらに成句などの使われ方の実状を把握し, それを lexicon として新たに記載 (list) し, 必要に応じて加筆修正していかなければならない。本稿は理想的な辞書のあり方について, 語形成要素 (word element) である語彙形式, 主として接頭辞についての辞書の取り扱いを検証し, 語形成過程のメカニズムについて新たな考察を加えようとするものである。

## 2 語形成の複眼的視点

接辞 (AF: affixes) は接頭辞, 接尾辞を含む. 英語に関しては接中辞の存在は稀薄である. 少なくとも辞書にリストし得るように慣習化された接中辞は存在しない. それがギリシャ語系, ラテン語系, アングロ・サクソン語系 (古英語, 中英語) の三つの流れを汲むものであるにしても, 与えられた語形式が旧来の意味が稀薄になり, 第一強勢を取ることもない場合には接辞と考えることができる. 派生によって生成される語は基語 (Base) とこの接辞 (AF) との結合は構成主義的 (compositional) かつ分析的 (analytic) な結合によって成立する複合形態をとる.

これに対して上記三つの語形成要素のいずれでもなく基本的には統語論に属する句 (文) から語が形成される場合がある. 句 (文) が語彙化あるいはイディオム化されて辞書にリストされている場合である. この場合の語形成要素はゲシュタルトとしての句 (文) 全体である. したがってこの種の語の意味はゲシュタルト的かつ総合的 (synthetic) なもので構成要素に分割できない性質のものである.

ここでは語形成には形態素の組み合わせによってなると考える分析的・構成主義的な視点と句 (文) の語彙化あるいはイディオム化によってなる総合的・ゲシュタルト的な視点の二つがあるという複眼的視点を取っておきたい. どちらか一つを取って他を考慮しないことは語形成の相を貧弱にしてしまう. したがって本稿では語形成における両者の複眼的視点を取って形態論と辞書論との相関関係を考察していくことになる.

### 2.1 形態素から作られる語

構成主義的に接辞の連鎖・結合によってつくられる語は文法的カテゴリー (品詞) や意味, 従って機能を順次変えることが可能である. 例えば語 internationalization は [[*inter-*] + [*nation*] + [*-al*] + [*-ize*] + [*-ation*]] となり, 基語を [*nation*] として名詞 (internation) - 形容詞 (international) - 動詞 (internationalize) - 抽象名詞 (internationalization) と品詞と意味を順次変えていく. *inter-* は名詞基語につく接頭辞で基語に来る名詞の間の双方向的関係を表す. 例えば *inter-city*, *inter-college* などの例がある. 指小辞 (diminutives) の場合は〈小ささ〉〈可愛らしいさ〉〈親愛の気持〉などを特徴として全体の品詞は基語のそれと変わらないながら話者の基語である名詞に対する心的態度が反映されたものとなる. 例えば *Jack* に対して *Jack-y/-ie*, *duck* に対して *duck-ling* のような例がそれである. *friendship*, *brotherhood* などの接尾辞は具体名詞を抽象名詞にしているが, ここにも接辞の派生機能が働いている.

さらに基語の動詞を名詞にする接尾辞 *-ment* の場合, *government* は *govern* から派生されたものではあるが前者は単に *govern* すること以上に特化された意味をもっている. 他に *-ize*, *-(i)fy*, *-en* はそれぞれ基語である形容詞あるいは名詞を動詞にしてある行為者が行為した結果・状態を表す構文をつくる.

接辞に加えて連結辞と言われるものがある. *agriculture* の *agri-* はこれ自体で語として句 (文) の中に表れることは引用でもない限りまずおこりえない. これは *agro-* として古来ギリシャ語で畑 (field) を表す名詞であった. しかし *field* という固有の意味を確実にもっていることに加えて *agriculture* となると第一強勢はこの *agri-* の部分に置かれている. 一般的に接辞は意味が稀薄であり, 第一強勢を取ることは少ないが, *agri-* のような連結辞では第一強勢を取りながらも自立した語とは言い難く, かつ機能性をもっぱら引き受ける接尾辞ともいい難く中間的な存在であるといえる. 他に *anthropology* の *anthropo-*, *aquarium* の *aqua-* 等がその例である. いずれにしても接辞と連結辞の存在は分析的, 構成論的な視点で形態素を基盤にした (morpheme-based) 語形成過程の基盤をなすものであるといえる.

### 2.2 句 (文) から作られる語

これに対して語形成過程には句が語彙化 (イディオム化) されて語になる場合がある. “on the spot” は形式的には前置詞句である. しかしこれが語彙化されて「即興に/の」の意味をもつ一つの語となる. さらに “stick in the mud” は動詞句であるが「独創性がなくつまらない」という意味をもつ語となる. このような語形成過程はその構成要素の意味の総和は必ずしも全体の意味にはならない点, 総合的・ゲシュタルト的な側面をもっている. 次の例をみていただきたい.

- (1) a. *stick-to-itiveness*

## b. standoffishness

(1a) は “stick to it” という句 (文) が接尾辞の *-ive, -ness* によって語彙化され、この句全体が語としての機能を果している。(1b) は “stand off” という動詞句に接尾辞の *-ish, -ness* が付加され、ここでも動詞句から語への機能変化が起っている。

この様に句から語が作られるもっとも基本的なものが句が語彙化されてできる複合語である。この語彙化とは語形成過程におけるある語の特異性 (idiosyncrasy) が実現したものである。一つの語形式の意味は必ずしもこれを構成している語形成要素の総和ではない。その意味で句 (文) から語が作られていく過程はゲシュタルト的である。例えば black board は句では「黒い板」であるが、語では「黒板」である。句についてはこれをパラフレイズすることは可能であるが、語はもうこれ以上パラフレイズすることはできない。「黒板」はただの「黒い板」ではない。同様に「温室」(green house) はただの「緑の家」ではない。句 (文) からゲシュタルト的特徴をもった語はある一つの認知的まとまりをもって特化された意味をもつものなのである。

## 2.3 語形成の認知的過程

語は形態素からも句からも作られる。この複眼的二面性は語形成の主要な方策 (strategy) として了解されていていい。形態素を基盤にした構成主義だけでは語形成は十分説明できないのと同様にゲシュタルト的な語彙化あるいはイデオム化だけでも語形成を十分説明することはできない。語形成には人間の思考を秩序づけ、拡張するための複雑な認知的過程が深く関与しているからである。

語は人間のメンタルなプロセスがコミュニケーションの必要性によって作り出される概念が形式化されたものである。名詞は概ね命名性がはたらき、動詞はあるものの状態や動作過程を表す。形容詞、副詞はそれぞれ名詞、動詞を下位範疇化して修飾する。接続詞は別々の語や句 (文) の概念を結び付け、前置詞は物 / 人の主動詞に対する空間・時間、道具、行為者、対象等の概念を定着させる。いずれにしても語形成過程は概念化つまり認知的範疇化のプロセスを引き受けるものに他ならない。

これが典型的に表れるのは指小辞である。Jack に対して Jacky/ie は基語 Jack に対する話者の心的態度が反映されている。この接辞は小ささ、親愛さ、可愛さ、そして恐らくはプラスの評価を引き受けている。特徴としては [+attitudinal], [+hypocoristic], [+evaluative] な特徴 (features) を備えているといえよう。その中身はこの接辞 (指小辞) に関しては [+smallness], [+cordial], [+positive] である。aunty, doggy, mummy, piggy, puppy などその例は多い。ここでも基語に対して接辞は話者の主観的な態度や気持が組み込まれているといえるのである。

ここには次のような認知的スキームがはたらいっていると考えられる。

## (2) 語基 (Base) + 接辞 (affix)

ここで基語が名詞の場合、接辞はこの基語に関して話者の主観的な心的態度あるいは認知的、評価的視点が反映されているといえるのである。

他の例でもこのことが言える。book はある「本」と称されるものの命名、つまり認知的範疇化の結果として付与された象徴 (シンボル) としての形式である。しかし bookish となれば接尾辞をつけることによって話者の認知的拡張がおこる。*-ish* は基語を形容詞に変容させ、属性・特徴を表す派生語になる。ここには話者の主観的な態度 (attitudinal) や判断・評価 (evaluative) が接辞に反映されているといえるのである。

さらに、beauty という基語に対して beautiful, beauteous とそれぞれ形容詞形成の接尾辞をつけて派生させた場合、基語に対する心的な趣が *-ful, -ous* に込められているといえる。前者はアングロ・サクソン語の full (of) に由来し、後者はラテン語系の「特徴を備えた」という意味を表す接尾辞 *-ous* に由来しているが、両者を使い分けることによって互いにニュアンス (話者の認知的態度) が微妙に異なって表出されるのである。

## 3 語形成要素の種類と語形成マトリックス

## 3.1 語形成要素の三種類

語の構成要素は3種類の要素が考えられる。語彙形式 LF (lexical form)、連結辞形式 CF (combining form)、接

辞形式 AF (affixal form) である。LF は概ね、語形成上において自立した機能を持ち、単独で文中で用いられ、より内容指示性と自立性が高い。AF はその逆で接辞性が高く、単独では文中で用いられることはなく、内容指示性が低く自立性も低く、基本的に第一強勢をとることはない。CF は内容指示性は存在するが自立性は低く、時に第一強勢を取る場合もあり、LF と AF の中間的なものであるといえよう。AF は機能性が高く、第一強勢を取ることは極めてまれにしかない。この三つの語形成要素を内容指示性、自立性の高いものから順に並べれば、概ね次のような順序になる。

### (3) LF > CF > AF

これは文法化の概念に特徴的なある方向性をもって通時的に変化していく cline を示唆しているといえる。つまり現在は接辞 (AF) として用いられている語形成要素は通時的、歴史的にはかつて自立した語 (LF) であったことがあり、文法化現象として永い年月を経て機能性を増し、本来の意味内容も稀薄になり機能的にも文法カテゴリー的にも変容を来していったと考えられる十分な理由があるのである。

### 3.2 語形成要素間の境界と特徴

語といってもこのようにその形成要素は3種類あるがこの境界は思いの外複雑である。LF は旧来自由形態素といわれ、それ単独で文 (句) 中で自立した語としての機能を果たすものである。句が語彙化した場合もこの中に含めることができる。CF と AF は拘束形態素としての機能をもつが、両者は必ずしも同じではない。

CF の多くは Marchand (1969) では semi-affixes とよばれ、Bauer (1983) では neo-classical compounds とよばれ、多くは借用語 / 外来語であるギリシャ語、あるいはラテン語に語源的な由来をもつものである。したがって本来意味論的に内容指示性が高いものであった。例えば、*agro-* はギリシャ語 *agros* で field, *audio-* はラテン語で *audire* で hear, *chrono-* はギリシャ語で *khronos* で time を表すといった具合である。基準を (i) 内容指示的であるかどうか、(ii) 文法機能として自立性があるかどうか、(iii) 第一強勢をとり得るかどうか、(iv) 語根あるいは語幹たりえるかどうか、(v) それぞれの要素同志の結合による複合語、複合連結辞、複合接辞が可能かどうか等の特徴基準にして表にすると概ね次のようになる。

Table 1

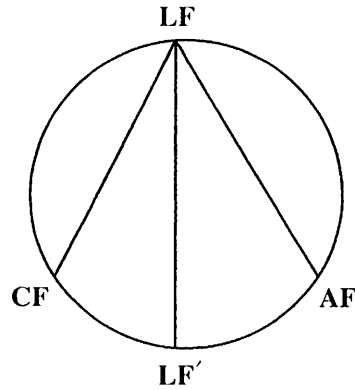
	内容指示	自立性	第一強勢	語根/語幹	複合付加
LF	+	+	+	+	+
CF	+	-	+	+	+
AF	-	-	-	-	+

AF の複合付加は *-ivity* (*-ive+ -(i)ty*), *-mental* (*-ment+ -al*), *-ization* (*-ize+ -ate+ -ion*) 等のことをさしている。

さらにこの三つの組み合わせの可能性を前提にすれば LF+LF, LF+CF, LF+AF, CF+LF, CF+CF, CF+AF, AF+LF, AF+CF, AF+AF の九つの組み合わせが可能になる。Sapir (1921) はすでに語形成の単位として (i) A タイプ (ヌートカ語の *hamot* でいっさい変化なし), (ii) A+ (0) タイプ (英語の *sing*, *bone* など潜在的に接辞を取り得るもの), (iii) A+ (b) タイプ (*singing*, *bones* など), (iv) (A) + (b) タイプ (ラテン語の *hortus* で *hort-* は語幹でこのまま実際に用いられない) と四つに分けている。本稿でいう LF は A, CF は (A) に相当すると考えられる。

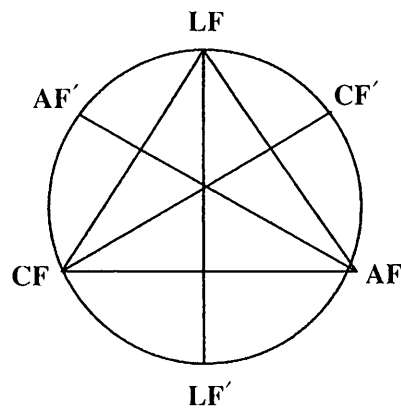
### 3.3 語形成の円形マトリックス

以上のような語形成の多様性を次頁 [Figure 1] のような語形成の円形母型 (マトリックス) で説明することが可能であると思われる。まず LF, CF, AF を円周を三等分する三つの極として置く。便宜的に LF を頂において考えてみる。結果として [Figure 1] でみるように LF-CF, LF-AF の二つのラインができる。この両ラインは語形成のプロセスにおいては接尾形成のラインとなり、さらに LF の対極に LF' を置くと LF-LF' ラインとして複合語形成のラインとなる。LF' はもう一つ別の LF という意味合いで実際には LF+LF の結合タイプである。ここでは便宜的に LF を頂点においてみた。



[Figure 1]

同様に CF の対極に CF', AF の対極に AF' をおいて CF と AF を結んでみる. それぞれ CF-CF', AF-AF' の結合タイプによる複合語が成立している. これらを統一して明示的に表すのに次のような語形成上の図式モデルを考えることができる.



[Figure 2]

この図に従えば, AF を極にした場合, AF-LF, AF-CF のラインは接頭形成のラインである. さらに CF を極にした場合それぞれ CF-LF は接頭形成, CF-AF は接尾形成のラインと考えることができる. LF のところで述べたように, CF, AF それぞれの対極にあつて描かれる直径を表す直線ラインは CF-CF', AF-AF' の組み合わせによる新たな複合語のラインである. そして極の位置にある LF, CF, AF を結ぶラインは語形成上の母型として中核的な三角形を形成しているといえる.

この三角形の各辺が示すつながりは双方向的なものである. ここで左回りに LF-CF, CF-AF, AF-LF という三つの方向に対して右回りに LF-AF, AF-CF, CF-LF の三つの方向があり, 合計六つの方向性が示されている. これに対極同士が繋がって複合語を形成するラインを加えると九つの語形成ラインがすべてここに表されていることになる. これに例を添えてまとめると次のようになる.

- (4) LF+CF : duty-free south-bound fire-proof  
 CF+AF : psychic social anthropology bibliophile  
 AF+LF : insane endanger dishonest decompose  
 LF+AF : agreement friendly happily active beautiful childhood  
 AF+CF : consist receive permit conduct convince provide expect  
           induce impose  
 CF+LF : archduke agriculture hydroplane  
 LF+LF : steam boat rainbow blueprint green house  
 CF+CF : sociology thermometer telegram aquifer  
 AF+AF : ultraism unify multitude superable

ここで複合語は通常 LF 同志の結合として考えられてきているが, この図式モデルにしたがって, CF+CF タイ

プと AF+AF タイプの二つの複合語タイプを新たに提案したいと思う。

### 3.4 三種類の複合語

複合語は元來語と語の結合によって形成されるもう一つの語のことであるが、基本的なことは複合 (compound) である限り、結合要素は同等のステイタスをもっているものと考えられる。一般的には LF 同士の steam boat, green house, handout, underwear, table tennis, などは複合語と認められているが、CF, AF の場合も LF の場合と同様、CF+CF, AF+AF もそれぞれ語として成立しておればこの種の結合も複合語として考えられない理由はない。事実多くの語、とくに専門用語や学術用語は CF+CF によって作られている。例えば以下のようなものがある。

(5) astronomy    cardiogram    diameter    geography    monologue    pentagon    psychology    sociogram  
sociology    telephone    thermometer

ここで *socio-* も *-ology* も独立した語ではない。しかしそれぞれが内容をもった語形成要素である。後者の第一母音には強勢すら置かれている。sociogram の場合は強勢は前者の *socio-* の部分である。これら二つは CF であると考えられよう。

AF + AF も数はそれほど多いとはいえないが、以下のようなものが例として考えられる。

(6) ultraism    unify    multitude

おそらくこの組み合わせを複合語とする議論はこれまであまりなかったであろう。しかし語形成を考えるときに無視できない組み合わせのタイプであるに違いない。筆者はこの種の CF+CF, AF+AF のタイプの語結合も複合語として考えておきたい。

## 4 いくつかの問題提起

### 4.1 辞書記述上の矛盾点

本稿の考察は一つの矛盾点の指摘から出発している。LDCE<sup>3</sup>では連結辞の記述・説明のあと、例として *Anglo-* がとられている。次にこの *Anglo-* を同一辞書で調べると接頭辞 (Pref) として出ている。*Anglo-* はこの辞書では連結辞でもありかつ接辞でもあるというわけである。同様に AHD<sup>3</sup>では CF の概念説明のところで *electromagnet* の *electro-*, *geochemistry* の *geo-* が例示されている。しかしこれを同一辞書で引くと接頭辞 (Pref) になっている。従って *electro-* や *geo-* はこの辞書では連結辞でありかつ接辞でもあるということになる。ここに両辞書における記述上の矛盾あるいは曖昧さが存在するといえる。それでは *electro-* や *geo-* にしても接頭辞なのか、連結辞なのかどちらなのかという問題が生じてくる。LDCE<sup>3</sup> や AHD<sup>3</sup> はこの揺れに対して CF の概念を認めない立場を取り、すべて接辞 (この場合は接頭辞) として記載・分類している。他の辞書は CF を認める立場をとっており、辞書によって接辞の概念をどのように規定しているのかについてはばらつきのあることは興味深いことである。

### 4.2 接頭辞の辞書記述の分布

それでは同じ接頭辞でありながら辞書によってどのような取り扱いをうけているのであろうか。この間の事情をそれぞれの authentic な辞書がどのように取り扱っているかを調べていくとそのばらつきの多様さと傾向がわかる。本稿では英米それぞれの 10 種類の辞書で語頭の接頭辞と連結辞を含む語形成要素 139 項目についてそれぞれの CF がどのように記述されているかを調査してみた。以下はその結果である。使用した辞書は以下の通りである。

OED<sup>2</sup> ---- Oxford English Dictionary (Second Edition)

OALD<sup>4</sup> ---- Oxford Advanced Learner's Dictionary (Fourth Edition)

CED<sup>3</sup> ---- Collins English Dictionary (Third Edition)

LDCE<sup>3</sup> ---- Longman Dictionary of Contemporary English (Third Edition)

RHD ---- Random House Dictionary

AHD<sup>3</sup> ---- American Heritage Dictionary (Third Edition)

WED ---- Webster's Third New International Dictionary

WF ----- Word Finder

ODE<sup>2</sup> ----- Oxford Dictionary of English (Second Edition)CBD<sup>3</sup> ---- Collins Cobuild English Dictionary for Advanced Learners (Third Edition)

なお次の表中に出てくる ok は affix として辞書記載のあるもの, CF は combining form,  $\phi$  は辞書記載されていないことを表している。さらに数は少ないが, comb は in combination, comp は compound, ouic は often used in combination として辞書記載されていることを示している。

	OED <sup>2</sup>	OALD <sup>4</sup>	CED <sup>3</sup>	LDCE <sup>3</sup>	RHD	AHD <sup>3</sup>	WED	WF	ODE <sup>2</sup>	CBD <sup>3</sup>
A-	ok	ok	ok	ok	ok	ok	ok	ok	ok	ok
Acro-	CF	$\phi$	CF	$\phi$	CF	ok	CF	$\phi$	$\phi$	$\phi$
Ad-	ok	$\phi$	ok	$\phi$	ok	ok	ok	ok	ok	$\phi$
Aero-	CF	CF	CF	ok	ok	ok	CF	CF	CF	ok
After-	comb	$\phi$	$\phi$	ok	$\phi$	$\phi$	$\phi$	$\phi$	$\phi$	ok
Agro-	CF	CF	CF	ok	CF	ok	CF	CF	CF	ok
All-	$\phi$	ok	comb	ok	$\phi$	$\phi$	$\phi$	$\phi$	$\phi$	ok
Allo-	CF	$\phi$	CF	$\phi$	CF	ok	CF	CF	CF	$\phi$
Ambi-	$\phi$	CF	CF	ok	ok	ok	ok	$\phi$	$\phi$	$\phi$
Amphi-	ok	CF	ok	$\phi$	ok	ok	ok	CF	CF	$\phi$
Anglo-	CF	CF	CF	ok	CF	ok	CF	CF	CF	ok
Ante-	ok	ok	ok	ok	ok	ok	ok	ok	ok	$\phi$
Anthropo-	CF	CF	CF	ok	CF	ok	CF	CF	CF	$\phi$
Anti-	ok	ok	ok	ok	ok	ok	ok	ok	ok	ok
Aqua-	CF	$\phi$	$\phi$	$\phi$	CF	ok	CF	$\phi$	CF	$\phi$
Arch-	ok	CF	CF	ok	CF	ok	ok	CF	CF	ok
Astro-	CF	CF	CF	ok	CF	ok	ok	CF	CF	ok
Audio-	CF	CF	CF	$\phi$	CF	ok	CF	CF	CF	$\phi$
Auto-	CF	CF	CF	ok	CF	ok	CF	CF	CF	$\phi$
Be-	ok	ok	ok	ok	ok	ok	ok	ok	ok	ok
Bi-	ok	ok	CF	ok	CF	ok	ok	CF	CF	ok
Biblio-	comp	CF	CF	ok	CF	ok	CF	CF	CF	$\phi$
Bi(o)-	CF	CF	CF	ok	CF	ok	CF	CF	CF	ok
By-	comp	ok	ok	ok	CF	ok	ouic	ok	ok	$\phi$
Cardi(o)-	$\phi$	CF	CF	ok	CF	ok	CF	$\phi$	CF	$\phi$
Carmo-	CF	$\phi$	CF	ok	CF	ok	CF	$\phi$	$\phi$	$\phi$
Cata-	comp	$\phi$	ok	$\phi$	ok	ok	ok	ok	ok	$\phi$
Cent(ū)-	CF	CF	ok	ok	CF	ok	CF	CF	CF	$\phi$
Chrono-	$\phi$	CF	CF	ok	CF	ok	CF	CF	CF	$\phi$
Cine-	$\phi$	CF	CF	ok	CF	$\phi$	CF	CF	CF	$\phi$
Circum-	ouic	$\phi$	ok	ok	ok	ok	ok	CF	ok	$\phi$
Co-	ok	ok	ok	ok	ok	ok	ok	ok	ok	ok
Con-	ok	$\phi$	ok	ok	ok	ok	ok	ok	ok	$\phi$
Contra-	ok	ok	ok	ok	ok	ok	ok	CF	ok	$\phi$

	OED <sup>2</sup>	OALD <sup>4</sup>	CED <sup>3</sup>	LDCE <sup>3</sup>	RHD	AHD <sup>3</sup>	WED	WF	ODE <sup>2</sup>	CBD <sup>3</sup>
Counter	ok	CF	ok	ok	CF	ok	ok	CF	ok	ok
Cross	ouic	CF	CF	ok	CF	φ	CF	CF	CF	φ
Crypt(o)-	CF	CF	CF	ok	CF	ok	CF	CF	CF	ok
De-	ok	ok	ok	ok	ok	ok	ok	ok	ok	ok
Deca-	comp	φ	ok	ok	CF	ok	CF	CF	CF	φ
Deci-	comb	CF	ok	ok	CF	ok	CF	CF	CF	φ
Demi-	φ	ok	ok	ok	CF	ok	ok	ok	ok	ok
Demo-	φ	CF	CF	φ	CF	φ	CF	φ	φ	φ
Derm(o)-	φ	CF	CF	φ	CF	ok	CF	φ	φ	φ
Di-	ok	ok	ok	ok	ok	ok	CF	CF	ok	φ
Dia-	ok	φ	ok	φ	ok	ok	ok	ok	ok	φ
Dis-	ok	ok	ok	ok	ok	ok	ok	ok	ok	ok
Down-	φ	ok	φ	ok	φ	φ	φ	φ	φ	φ
Eco-	φ	CF	CF	ok	CF	ok	CF	CF	CF	ok
Electro-	CF	CF	CF	ok	CF	ok	CF	CF	CF	ok
En-	ok	ok	ok	ok	ok	ok	ok	ok	ok	ok
Equi-	CF	CF	CF	ok	CF	ok	CF	CF	CF	φ
Ever-	φ	φ	φ	φ	φ	φ	φ	φ	φ	ok
Ex-	ok	ok	ok	ok	ok	ok	ok	ok	ok	ok
Extra-	ok	ok	ok	ok	ok	ok	ok	CF	ok	ok
Fore-	ok	ok	ok	ok	ok	ok	ok	CF	CF	φ
Foster	φ	comp	φ	ok	φ	φ	φ	φ	CF	φ
Geo-	CF	CF	CF	ok	CF	ok	CF	CF	CF	ok
Gon(o)-	ok	φ	CF	φ	CF	ok	CF	φ	φ	φ
Grani-	φ	φ	CF	φ	CF	ok	CF	φ	φ	φ
Great	φ	φ	ok	φ	comb	ouic	φ	φ	φ	ok
Haem-	φ	CF	CF	ok	CF	ok	CF	CF	CF	φ
Half	ouic	φ	φ	φ	φ	φ	φ	φ	φ	φ
He-	φ	comp	comb	ok	φ	φ	ouic	comb	comb	φ
Hemi-		φ	ok	φ	CF	ok	ok	CF	ok	φ
Hetero-	CF	CF	CF	ok	CF	ok	CF	CF	CF	φ
Homo-	CF	CF	CF	ok	CF	ok	CF	CF	CF	φ
Hydro-	CF	CF	CF	ok	CF	ok	CF	CF	CF	φ
hyper-	ok	ok	ok	ok	ok	ok	ok	ok	ok	ok
In-	ok	ok	ok	ok	ok	ok	ok	ok	ok	ok
Infra-	CF	CF	CF	ok	ok	ok	ok	CF	ok	φ
Inter-	ok	ok	ok	ok	ok	ok	ok	ok	ok	ok
Intra-	ok	ok	ok	ok	ok	ok	ok	ok	ok	φ
Iso-	CF	CF	CF	ok	CF	ok	CF	CF	CF	φ
Kilo-	φ	CF	ok	ok	CF	ok	CF	CF	CF	ok
Macro-	CF	CF	CF	ok	CF	ok	CF	CF	CF	ok
Mal-	ok	CF	CF	ok	CF	ok	CF	CF	CF	ok
Mega-	CF	CF	CF	ok	CF	ok	CF	CF	CF	ok
Metro-		φ	CF	φ	CF	ok	CF	φ	φ	φ
Micro-	CF	CF	CF	ok	CF	ok	CF	CF	CF	ok
Mid-		CF	CF	ok	CF	ok	uic	φ	CF	ok





	OED <sup>2</sup>	OALD <sup>4</sup>	CED <sup>3</sup>	LDCE <sup>3</sup>	RHD	AHD <sup>3</sup>	WED	WF	ODE <sup>2</sup>	CBD <sup>3</sup>
Syn-	CF	φ	ok	ok	ok	ok	ok	ok	ok	φ
Telchno-	CF	CF	CF	ok	CF	φ	CF	φ	CF	ok
Tele-	CF	CF	CF	ok	CF	ok	CF	CF	CF	φ
Theo-	φ	CF	CF	ok	CF	ok	CF	CF	CF	φ
Thermo-	CF	CF	CF	ok	CF	ok	CF	CF	CF	ok
Trans-	ok	ok	ok	ok	ok	ok	ok	ok	ok	ok
Tri-	ok	ok	ok	ok	CF	ok	ok	CF	CF	ok
Ultra-	ok	ok	ok	ok	ok	ok	ok	CF	ok	ok
Un-	ok	ok	ok	ok	ok	ok	ok	ok	ok	ok
Under-	ok	ok	ok	ok	ok	ok	ouic	ok	ok	ok
Uni-	CF	CF	CF	ok	CF	ok	ok	CF	CF	φ
Up-	ok	ok	ok	ok	CF	ok	ouic	ok	ok	φ
Vice-	ok	CF	comb	ok	CF	ok	ok	CF	CF	ok

### 4.3 接頭辞記述分布

ここで接辞と判断される ok の数を A, 連結辞あるいはそれに近い連結語である CF/comb の数を B, 辞書に記載されていないことを示す φ の数を C とすると, A/B/C の数が自動的に分かる。例えば, *a-* は 10/0/0, *acro-* は 1/4/5, *ad-* は 7/0/3 といった具合である。数字の合計はつねに調査した辞書の数である 10 になる。この結果を接頭辞記述分布表にすると以下ようになる。

接頭辞記述分布表：

A-:	Acro-:	Ad-:	Aero-:	After-:	Agro-:
10/0/0	1/4/5	7/0/3	3/7/0	2/1/7	3/7/0
All-:	Allo-:	Ambi-:	Amphi-:	Anglo-:	Ante-:
3/1/6	1/6/3	4/2/4	5/3/2	3/7/0	9/0/1
Anthropo-:	Anti-:	Aqua-:	Arch-:	Astro-:	Audio-:
2/7/1	10/0/0	1/4/5	5/5/0	4/6/0	1/7/2
Auto-:	Be-:	Bi-:	Biblio-:	Bi(o)-:	By-:
2/7/1	10/0/0	6/4/0	2/7/1	3/7/0	6/3/1
Cardi(o)-:	Carpo-:	Cata-:	Cent(i)-:	Chrono-:	Cine-:
2/5/3	2/4/4	6/1/3	3/6/1	2/6/2	1/6/3
Circum-:	Co-:	Con-:	Contra-:	Counter-:	Cross-:
6/2/2	10/0/0	8/2/0	8/1/1	7/3/0	1/7/2
Crypt(o)-:	De-:	Deca-:	Deci-:	Demi-:	Demo-:
3/7/0	10/0/0	3/5/2	3/6/1	8/1/1	0/4/6
Dermo-:	Di-:	Dia-:	Dis-:	Down-:	Eco-:
1/4/5	7/2/1	7/0/3	10/0/0	2/0/8	3/6/1
Electro-:	En-:	Equi-:	Ever-:	Ex-:	Extra-:
3/7/0	10/0/0	2/7/1	1/0/9	10/0/0	9/1/0
Fore-:	Foster-:	Geo-:	Gon(o)-:	Grani-:	Great-:
7/2/1	1/2/7	3/7/0	2/6/2	1/3/6	2/2/6
Haem-:	Half-:	He-:	Hetero-:	Hom(o)-:	Hydro-:
2/6/2	0/1/9	1/5/4	2/7/1	2/7/1	2/7/1

Hyper: 10/0/0	In: 10/0/0	Infra: 5/4/1	Inter: 10/0/0	Intra: 9/0/1	Iso: 2/7/1
Kilo: 4/5/1	Macro: 3/7/0	Mal: 4/6/0	Mega: 3/7/0	Metro: 1/4/5	Micro: 3/7/0
Mid: 3/6/1	Milli: 5/5/0	Mini: 5/4/1	Mis: 10/0/0	Mock: 0/1/9	Mono: 3/7/0
Much: 1/1/8	Multi: 3/7/0	Nano: 3/5/2	Narco: 6/2/2	Neo: 3/7/0	Neuro: 3/7/0
Non: 10/0/0	Nona: 1/5/4	Octo: 2/6/2	Off: 2/1/7	Omni: 2/7/1	On: 1/0/9
Out: 9/1/0	Over: 6/2/2	Pan: 3/7/0	Para: 7/2/1	Penta: 2/7/1	Per: 6/0/4
Philo: 1/7/2	Photo: 3/7/0	Physio: 2/7/1	Poly: 3/7/0	Post: 10/0/0	Pre: 10/0/0
Pro: 10/0/0	Proto: 2/7/1	Pseudo: 3/7/0	Psycho: 3/7/0	Quadri: 3/6/1	Quasi: 4/5/1
Radio: 2/7/1	Re: 10/0/0	Retro: 8/2/0	Self: 4/6/0	Semi: 9/1/0	She: 1/6/3
Socio: 3/7/0	Step: 4/4/2	Sub: 10/0/0	Super: 8/2/0	Supra: 9/0/1	Syn: 7/1/2
Techno: 2/6/2	Tele: 2/7/1	Theo: 2/6/2	Thermo: 3/7/0	Trans: 10/0/0	Tri: 7/3/0
Ultra: 9/1/0	Un: 10/0/0	Under: 9/1/0	Uni: 3/6/1	Up: 7/2/1	Vice: 5/5/0

この結果みえてきたことのいくつかを次に問題提起してみたい。

#### 4.4 接辞性の度合い

上記の表の ok が 10 の場合は接辞性ももっとも高く、完全な接辞といってもよい。しかしむしろこれは少数派である。逆に  $\phi$  の数が多いということは未だ辞書に接頭辞として取り上げかねているということである。例えば *after-* は元来 OE, ME 系の言語で前置詞、接続詞として自立して用いられている。しかし *aftermath*, *afternoon*, *afterbirth*, *aftercare* など語の前に来て接頭辞的に用いられる場合も多い。しかし 10 のうち 6 つの辞書が取り上げていないことは *after* のもつ接辞性が弱いことを物語っている。上記の表にもとづいて整理してみると次のようなことが分かる。

- (i) ok が 10 の場合はどの辞書も例外なく接頭辞と認めているもので典型を接頭辞の典型を表すものであるといえよう。例えば, *a-*, *anti-*, *be-*, *co-*, *de-*, *dis-*, *en-*, *ex-*, *hyper-*, *in-*, *inter-*, *mis-*, *non-*, *post-*, *pre-*, *pro-*, *re-*, *sub-*, *trans-*, *un-* などできわめて卑近な接頭辞である。
- (ii) アングロ・サクソン語系で古英語, 中英語と伝えられてきている副詞的小辞や副詞あるいは名詞が接頭辞として機能している場合, 辞書に取上げられている度合いが一般的に非常に小さいことが分かる。*out-*, *over-*, *under-* を例外として *after-*, *down-*, *ever-*, *foster-*, *half-*, *much-*, *off-*, *on-*, 等を接頭辞として取上げている辞書の比較的少ないことは指摘しておかなければならない。
- (iii) 概ね互いに反意接頭辞でありながら *up-* (7/2/1) と *down-* (2/1/7) の取り扱いのギャップも興味深い。これは生産性 (productivity) に加えて頻度数からくるのであろう。さらに *on-* (2/0/8) と *off-* (2/1/7) の取り扱いを見てみるとこれらはまだまだ多くの辞書が接頭辞として認知していないことが分かる。

- (iv) **CF** の数が他の *ok* や  $\phi$  に比して多い場合はギリシャ、ラテン語に由来する連結辞であることがわかる。したがって拘束形態素ではあるが内容指示性が大きく、時に第一強勢をとる可能性があることが予測される。
- (v) *self* や *deci-* のように 5/5/0 の場合は典型的な接頭辞と連結辞の拮抗状態でどちらか一方に決め難いものもあるが、これは両者の中間的なものであると理解しておきたい。
- (vi) 10 種類の辞書のうち、と LDCE<sup>3</sup> と AHD<sup>3</sup> だけはまったく CF の概念を採用していないことがわかる。これは辞書編纂者の辞書制作の方針（ポリシー）と相俟って注目しておかなければならない。

総じてここで得られた数をどう読むかは興味深い問題であるが、筆者は接辞と連結辞の合計が 5 以上（従って調べた辞書の半分以上）の場合は拘束形態素としてのステイタスを認め、 $\phi$  が 6 以上の場合は接辞でも、連結辞でもなく自立性が高く、むしろ LF として認知しておきたいと思う。したがって *after-*, *all-*, *down-*, *ever-*, *foster-*, *half-*, *much-*, *off-*, *on-*, などは接辞あるいは連結辞への途上にあると考えておきたい。

接辞と連結辞との境界はやはり数字の大きい方をとるのが順当であろうと思われる。したがって *a-*, *ad-*, *amphi-*, *ante-*, *anti-*, *arch-* などは接辞, *acro-*, *aero-*, *agro-*, *allo-*, *Anglo-*, *anthropo-*, *astro-*, *audio-* などは連結辞ということになる。いずれにしても数字の信頼性の問題として適応できる数字は全体 10 の半数（したがって 5）以上でなければならないことを原則としておきたい。

#### 4.5 「連結辞 (CF) の概念を用いない」ということについて

CF とは Bauer (1983: 213) が neo-classical compounds として議論しているものに近いが、LDCE<sup>3</sup> と AHD<sup>3</sup> は CF による分類はせず、他の辞書で CF と記述しているものもすべて AF としている。これは拘束形態素の機能的側面に重点を置き、CF と AF との差異を認めない立場である。この結果として 4.1 で述べたように *Anglo-* や *electro-* のような記述上の矛盾をもたらす。さらに語形成要素をすっきりと AF であるか自立の LF であるかを二項対立的に峻別してしまうところに疑問が残る。たとえば *in-*, *pre-*, *-ly* のような機能性の高い AF と *agro-*, *amphi-*, *-(o)logy* などの意味内容性が高く第一強勢の乗得るものを同様に一つに括って <接辞> としてしまえるかどうかという問題が残る。したがって連結辞の概念を用いて辞書記述を行った方が説明力があるように思われる。

#### 4.6 「連結辞の記述・説明のばらつき」について

次にそれぞれの辞書には連結辞の記述・説明にはずいぶんのばらつきがあり、使用者がとまどう場合が多い。例えば、

- (a) 同じ語形成要素であっても *agro-*, *neuro-*, さらに *-ectomy* はある辞書 (OED<sup>2</sup>, OALD<sup>4</sup>, CED<sup>3</sup>, RHD) では連結辞であるが、別の辞書 (LDCE<sup>3</sup>, AHD<sup>3</sup>) では接辞である。
- (b) *-archy* は AHD<sup>3</sup>, LDCE<sup>3</sup> では接尾辞であるが、OALD<sup>4</sup>, CED<sup>3</sup>, WED では連結辞である。
- (c) *he-goat*, *she-goat* の *he-*, *she-* は LDCE<sup>3</sup> では接辞であるが他の辞書では連結辞であったり複合語の一部であったり、list していなかったりして取り扱いが多様である。ここでは *he-*, *she-* は男性、女性の文法的性を表すマーカーである。
- (d) 同じラテン語に根をもつ *counter-* と *contra-* においても RHD では前者を連結辞、後者を接辞として取り扱っている。
- (e) かつて欽定訳聖書のころには自立語として用いられていた *wise* は現在では *clockwise*, *lengthwise* のように概ね語尾の拘束形態素として生き残っているが、この *wise* は OALD<sup>4</sup>, AHD<sup>3</sup>, RHD では接辞、CED<sup>3</sup>, WED では連結辞として list されているが、LDCE<sup>3</sup> では list されていない。

## 5 ま と め

本稿では語形成過程の中で分析的・構成主義的方略と総合的・ゲシュタルト的方略の二つが複眼的な相補性において英語の語彙を豊かにしていることについて述べた。その上で語形成要素については LF, CF, AF の三種類に大別され、それぞれの要素の結合様式において 9 種類の結合様式のあることを述べ、これを包括的に説明する図式的モデルとして円形マトリックスを提唱してみた。

次に CF と AF の境界が定かではなく、辞書によって記載 (list) の有無を含めて実に様々な様相を呈している

ためにこの実際の姿を明らかにするために接頭の位置をしめる 130 項目のそれぞれの語頭辞について 10 種類の信頼性のある辞書に当てて記載の有無, 記載されているとすれば CF か AF かについて調べて表にしてみた。またそれぞれの項目について 10 の辞書のうち記載情況の分布を調べてその数を網羅的に記載した。その結果, ある接頭辞項目が CF であるか, AF であるかが比較的公平, 客観的に言えることを主張してみた。さらにラテン語由来動詞に焦点を当ててその接頭辞と基語 (Base) との関係を表にしてその作られ方を英語との関係で表にしてみた。

次に上記の知見を基礎資料 (データベース) にして辞書論を展開した。さまざまな辞書がある中でも一つだけの辞書を見ては気がつかない事象が多くあることがわかる。例えば, ①同じ語形成要素であっても *agro-*, *neuro-*, さらに *-ectomy* はある辞書 (OED<sup>3</sup>, OALD<sup>4</sup>, CED<sup>3</sup>, RHD) では連結辞であるが, 別の辞書 (LDCE<sup>3</sup>, AHD<sup>3</sup>) では接辞であること, ② *-archy* は AHD<sup>3</sup>, LDCE<sup>3</sup> では接尾辞であるが, OALD<sup>4</sup>, CED<sup>3</sup>, WED では連結辞であること, ③ *he-goat*, *she-goat* の *he-*, *she-* は LDCE<sup>3</sup> では接辞であるが他の辞書では連結辞であったり複合語の一部であったり, list していなかったりして取り扱いが多様であること, ④同じラテン語に根をもつ *counter-* と *contra-* においても RHD では前者を連結辞, 後者を接辞として取り扱っていること, ⑤かつて欽定訳聖書のころには自立語として用いられていた *wise* は現在では *clockwise*, *lengthwise* のように概ね語尾の拘束形態素として生き残っているが, この *wise* は OALD<sup>4</sup>, AHD<sup>3</sup>, RHD では接辞, CED<sup>3</sup>, WED では連結辞として list されているが, LDCE<sup>3</sup> では list されていないことなどである。

接辞と連結辞との関係を詳しく調査していけば辞書論の根幹にぶつかってまだ未解決の問題は多いことが分かる。理想的な辞書とはこれら現実の英語の姿を捉え, 記述・説明することが期待される。また, 英語の語形成要素の共時的な側面に加えて, その品詞や意味や機能の変化といった通時的側面をも妥当性をもって過不足なく記述・説明しているものでなければならないと思われる。

#### [参考文献]

- Bauer, Laurie. 1983. *English Word-formation*. CUP, Cambridge.
- Bradley, Henry. 1970. *The Making of English*. (Revised by Simeon Potter) MacMillan, London.
- Denning, Keith and William R. Leben. 1995. *English Vocabulary Elements*. OUP, Oxford.
- Hopper, Paul J. & E. C. Traugott. 1993. *Grammaticalization*. CUP, Cambridge.
- Jespersen Otto. 1922. *Language*. George Allen and Unwin, London.
- Lapointe, Steven G., D.K. Brentari, & P. M. Farrell. 1998. *Morphology and Its Relation to Phonology and Syntax*, CSLI, Stanford.
- Kageyama, Taro & Yoko Yumoto (影山太郎, 湯本陽子). 1997. 『語形成と概念構造』研究社出版.
- Katamba, Francis. 1993. *Morphology*. MacMillan, London
- Marchand, Hans. 1969. *The Categories and Types of Present-Day English Word-Formation*, (Second edition). Beck : Munich.
- Minamide, Kosei (南出康世). 『英語の辞書と辞書学』大修館
- Nishikawa, Morio. 1997. *Morphologization and Combining Forms*. Memoirs of the Faculty of Education, Kumamoto University. Vol. 46. pp. 207-223.
- Nishikawa, Morio. (西川盛雄) 1998. 「接頭辞形成と文法化現象」. 熊本大学教育学部紀要, 人文科学編, 第 47 号, pp. 87-99.
- Sapir, Edward. 1921. *Language — An Introduction to the Study of Speech —*. Hartcourt, Brace & World. : New York.
- Trask, R.Larry. 1996. *Historical Linguistics*. Arnold, London.
- Wierzbicka, Anna. 1985. *Lexicography and Conceptual Analysis*, Ann Arbor : Karoma Publishers.